

教育部
資料室

38 小国 531
光村

文部省検定済教科書

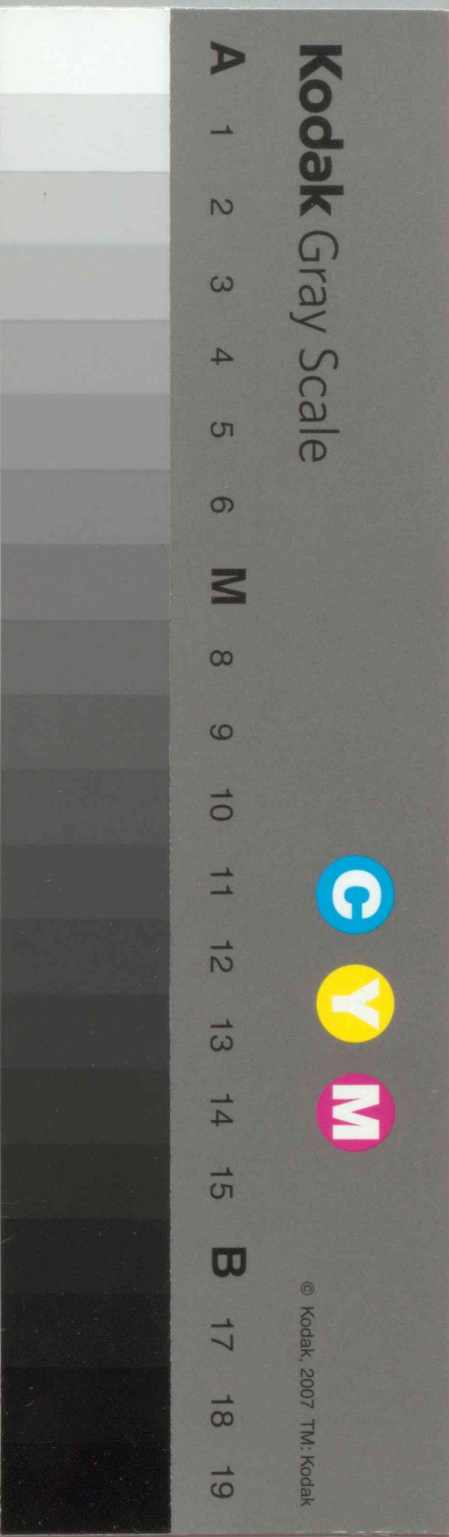
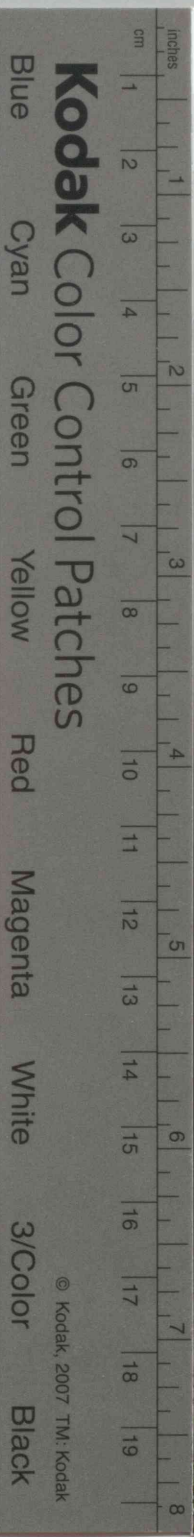
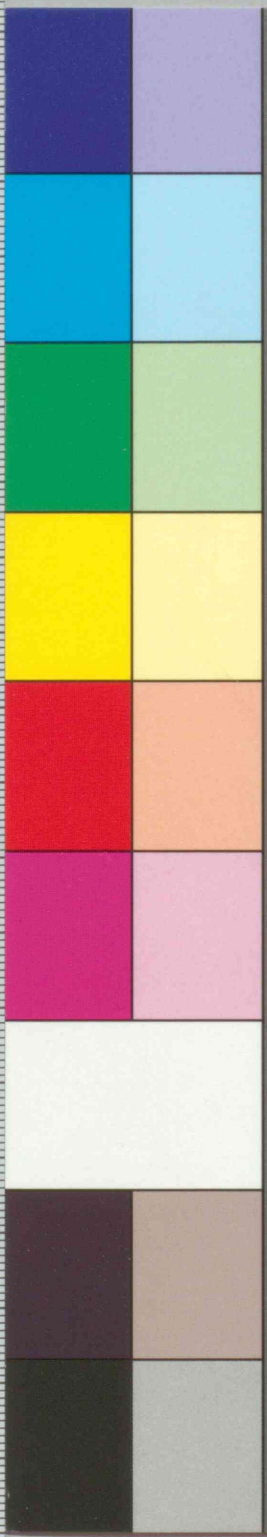
教科書文庫
6
720
34-1950
0130449897

石森延男編
金田心象書

書
方
五年上



小KCA
Mi65



60273
教科書文庫
6
720
34-1950
01304
49897



昭和二十五年八月十二日
文部省検定済
小学校国語科用

中央図書館

もくじ

一	心おぼえ	1
二	作文	2
三	注意すること	8
四	読書カード(その一)	10
五	散文詩	11
六	えはがき	16
七	電報	22
八	しらべたこと	24
九	読書カード(その二)	32

寄贈

教科書文庫
6
720
34-1950
0130449897

文字を書くときのこと

一 心おぼえ(えんぴつで 心おぼえや きめた ことなどを 正しく 書く)

広島大学図書

0130449897



広島大学
教育学部図書

おねをつくえにおりつけないこと。
 あまり目をひくくさげないこと。
 左手を紙上にのせ、左ひびを前につまみ、
 ださないうこと。

広島大学図書

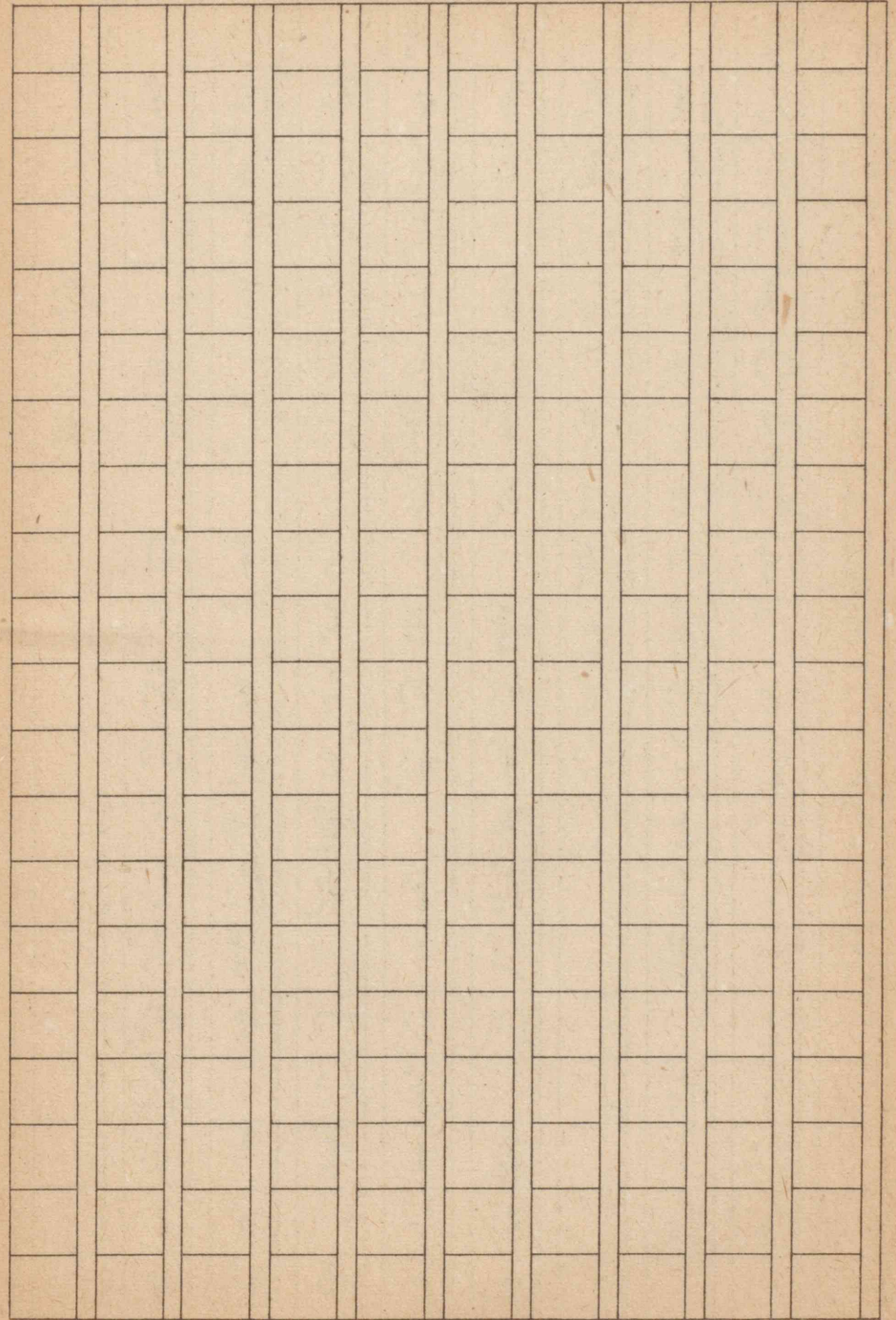
0130449897



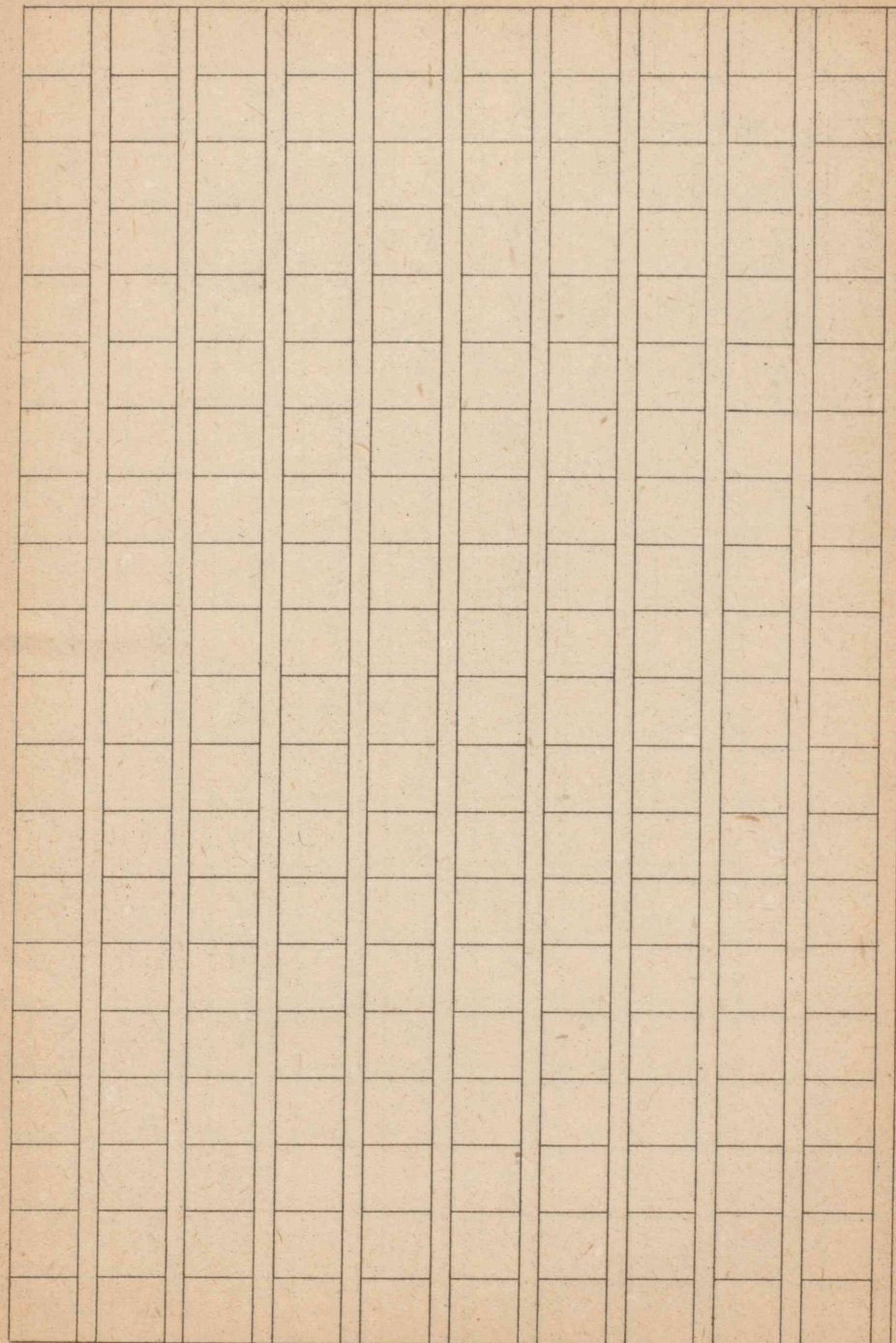
Empty grid for writing on page 2.

か	な		に	す	時	い	か		
ー	ん	ぼ	火	る	々	本	に	す	
い。	だ	く	花	ど	花	か	な	ず	
	か	は	が	い	火	げ	な	ー	思
お	あ	ふ	ち	音	を	の	で	い	出
ぼ	の	と	っ	が	あ	間	て	い	
ろ	家	も	て	す	げ	に	い	く。	
月	が	と	は	る。	て	ち	ず	っ	
夜	ず	の	消	音	い	ら	と	見	
の	っ	家	え	が	る	ち	と	わ	
こ	と	の	て	す	の	ら	見	た	
ん	む	こ	い	る	か	と	わ	す	
な	か	と	く。	た	ド	電	た	と	
日	ー	を		び	ー	気	す	う	
だ	の	思		に	ン	が	す	す	
っ	よ	い			ド	つ	暗		
た	う	だ		森	ー	い			
	に	り		の	ン	て			
	な	た		上	と	い			
	つ					る。			

とみん なさわぶ だした。 〃 たまになつた。 〃 あやなぎになつた。 と火花がちる。 せんこ花火を持たせて火をつけた。 パ子パ子 というと、子どもたちが集まってきた。 弟に 〃 みんな、花火をするぞ。 〃 いではーやいでいた。 ぼくがマッチを持って、 〃 星みつけた。 二ばん星みつけたと大空をあおい でーやいでいた。 ぼくがマッチを持って、 〃 星みつけた。 二ばん星みつけたと大空をあおい 役場の電気がついて、外で弟たちが一ばん



弟がふとい花火をしてほいとせがむの
でこれに火をつけることになった。もう耳
をふさいでいるものもある。竹ざおに花火を
つけて土につまみつけた。そうして火をつけた。
みんなばらばらとにげる。シユシユともぞて
いたがドンと音がして暗い空に火花がちっ
た。昼のように明るかった。
花火がおわるとみんなかえっていった。
あたりが、いっそう暗い気がした。こんな
思いがなつかしく目にうかんでくる。



使	よ	せ	ペ	る	先
い	い。	い	ン	よ	の
お		は	ド	う	は
わ			く	に	ず
っ		え	の	す	み
た		ん	持	る。	を
と		び	ち		利
ま		つ	か		用
は		の	た		し
		ば	や		て
ふ		あ			
い		い	書		は
て		と	く		や
お		同	時		く
く。		じ	の		書
		で	し		け

ペ	に	ペ	ペ		
ン	し	ン	ン	ペ	
は	て	先	は	ン	
	書	が		で	
な	く。		そ	文	
る		紙	の	字	
べ		の	内	を	
く		上	が	書	
か		に	わ	く	
る		平	を	と	
く		ら	下	ま	
使		に	に		
い		つ	向		
		く	け		
		よ	る。		
ペ		う			
ン					

三 注意すること (手本を見て、ペン字を方眼紙にきれいに書く)

四 読書カード(その二) (鉄筆で 読書調べカードを作る)
 (その カードに えんぴつで はっきりと 書きこむ)

題目	<p style="text-align: center;">金の魚</p>
感想	<p>この話は、ブレンキンという人の書いたものです。よくの深い漁夫のおかみさんが、いろいろな願いごとを金の魚にたのみます。けれども、とうとうもとの貧しい漁夫のおかみさんになつてしまふのです。人間はあまりよくを深くしてはならないと感得まりました。この文がたいへんきびきびと目に見えるように書かれてあるのに感心しました。</p>
氏名	立川まさ子

五 散文詩(ペンで 短文や 詩などを 方眼紙に 正しく 書く)

青	朝	月	い
空	明	の	ま
の	け	夜	も
美	の		美
い	空	星	い
も		の	も
の	夕	夜	の
	や	の	は
	け	美	ど
	の	い	こ
	空	さ	に
	の		で
	美		も
	い		あ
	さ		る

い	か	ど	楽	耳	風
ま	ら	こ	が	を	が
も、	か	か	さ	す	か
	さ	ら	こ	ま	す
ど	こ	さ	え	す	か
こ	え	こ	て	と、	に
に	て	え	く		耳
で	く	る	る	な	も
も	る。	と	よ	に	と
あ		も	う	か、	を
る。	美	な	だ。		す
	し	い		か	ぎ、
	い	が、		す	る。
	も			か	
	の	ど		な	
	は	こ		音	

	小	ド	か	わ	高
	鳥	つ	す	か	い
	が	に	ん	め	本
	鳴	美	だ	を	が
	い	し	空	だ	大
	て	い。	の	し	き
	い		中	か	く
	る。		に	け	え
			と	た	だ
			け	こ	を
			こ	ず	は
			ん	え	っ
			で	の	て、
			い	さ	
			る。	さ	
				が、	

樂	な	心	の	お	こ
し	に	が	で	に	に
く	で	け	あ	感	で
す	も	ひ	る。	じ	も、
る	毎	と		る	
こ	日	つ	心	心	そ
と	の	で、	が	を、	の
が	生		け		美
で	活	わ	ひ	も	し
さ	を、	れ	と	ち	い
る。		わ	つ	つ	も
	ゆ	れ	で	づ	の
(谷	た	は、	あ	け	を
川	か		る。	た	
徹	に、	ど		い	す
三)		ん		も	な

	し	し	毎	感	た
	か	さ	日	じ	だ、
	し	の	の	る	
		中	生	心	そ
	わ	に、	活	を、	の
	れ		の		美
	わ	そ	ら	わ	し
	れ	れ	ん	れ	い
	は、	を	ざ	わ	も
		失	つ	れ	の
	い	っ	と、	は	を、
	つ	て		失	
	で	い	あ	っ	す
	も、	る。	わ	て	な
			た	い	お
			だ	る。	に
	ど				



えはがきには、たてのと横のとあります。写真がいっぱいうつさ
れていて、文字の書けないときは、あてなの下のところに書きま
す。このえはがきは、たてのもので、写真がいっぱいで文字が書
けません。

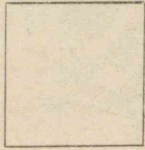
これは志賀高原です。この池はほん
とくにきれいで、おとぎの国の絵の
ようでした。兄は油絵で写生しま
した。私はクレヨンでかきました。



このえはがきは、横に写真をうつし
たものです。
写真のそばに、少しばかり文字を
書きこむところがあります。
ここを利用して、おもしろい文句を
書きましよう。

城戸・奈良・阿蘇・噴・熊

郵便はがき



奈良市東城戸町三

中西清一様

熊本市新町
二丁目
坂井五郎

POST CARD

このあいたの日よう日に、父につれられて阿蘇山にのぼりました。よくはれていたので、あたりの景色がよく見えまいた。噴火口としては世界でも屈指りの中に数えられる大きなものだと父がいていました。何万年前に噴火したのかわかりませんが、そのときのことか思われて自然の力におどろきまいた。記念に買ったえはがきを、お見せいたします。さようなら

九月四日

郵便はがき



POST CARD

(その二) (ペンで えはがきに あて名をはっきりと書く)

(その三) (ペンで えはがきに おもしろく書く)



きのうこん虫館を見学してきました。
めずらしい虫がたくさんひょうほんに
なっていました。きれいなのは、やはり
ちょうちよでいた。けんびきようでいろ
いろなものもぞきまいた。かの口
の先やのみの足などを見て、その大きいのに
びっくりまりました。

こん虫館でこんな絵はがき、
を売っていたのでお見せいた
ます。



(その四)



こんど
うつてきた
家からは
富士山が
よく見え
ます。
朝の富士も
美しいので
すが
夕べは
一だんと
りっぱに
見えます。

このえはがきはやはり横ですが、
この絵の中に、文字を書きこむこ
とができるようになっています。
あまり文句をたくさん書くと、せ
つかくの絵がそんじてしまいます。
あまり少くても、おちつかないも
のであります。
よく字くばりを考えて書く練習を
してみましょう。

紙信頼報電

杉並
すぎなみ

者校照	信送 午	●意注● 一 濁音又は半濁点のある文字の下は一字あけると 一 受信人に知らせようとする発信人の居所氏名は、通信文に続けて本文中に書くこと	手切便郵				類種
者信送	時 分						数字
「控」 [発信人] 居所 氏名 東京都杉並区大宮町一三 岡田キヨ子	文		本	定指	宛	名	局信著
							局信発
							番号
							付受
							時
							分

ア
ス
九
ジ
ハ
ハ
ト
ユ
ク

心局内
心得

静岡
オカケン
岡田友二
清水市三保六

紙信頼報電

七 電報 (ペンで電報を書く)

者校照	信送 午	●意注● 一 濁音又は半濁点のある文字の下は一字あけると 一 受信人に知らせようとする発信人の居所氏名は、通信文に続けて本文中に書くこと	手切便郵				類種
者信送	時 分						数字
「控」 [発信人] 居所 氏名	文		本	定指	宛	名	局信著
							局信発
							番号
							付受
							時
							分

心局内
心得

ハ しらべたこと(しらべた ことや 研究して まとめた ことを えんぴつで 手早く 書く)

読みかたの学習についてしらべたこと

一文をあやまりなく正しく読むことが第一。

ニ読めない文字やわからないことばがあったら、これを明らかにしていくこと。

三書いてあることばをはっきり理解していく。

このためには、次のようなことを考えていかななくてはならない。

- 。おちついて読んでいく。
- 。なにが書いてあるのか、文のすぢをよく考えながら読んでいく。
- 。ぶんのしたことを考えあわせながら読んでいく。
- 。文のおもしろさを発見していく。

。文の組みたてを明らかにしていく。

。文の書きあらわしかたをしらべていく。

。文の意味を大づかみにする。

。文の中味について話しあいをする。

四 文の内容を正しく音声にあらわすような読み
ぶりをとする。

そのときには、次のようなことに気をつける。

。正しい声調で読んでいく。

。はっきりとした気持のいい声で読んでいく。

。句とう点に気をつけて読んでいく。

。聞いている人によくわかるように読んでいく。

。わざとらしい声をださないで、すなおに読んでいく。

五意味をなるべく速くくみとるようにする。

。ドぶんで読書速度のレコードをつけておく。

。あやまった眼の運動や、くちびるの運動などをドぶんでなおしていく。

六読みかたといっしよにする学習

。書かれてあることをまとめて話をする。

。書かれてあることをもっとくわしく話をしてみ
みる。

。物語をさやく色してみ。

。物語をおもしろくシナリオになおしてみ。

。紙しばいにしてみ。

。実験したり観察したりしてみ。

七読みかたの学習をいやすくするためには。

- 。いゝ読物をでさるだけたくさん集めておく。
 - 。いゝ参考書や辞書をそなえておく。
 - 。地図や年表をそなえておく。
 - 。画集や写真帳、絵はがきなども集める。
- 八国語の教科書のほかに読むもの。

- 。新聞を読んでみよう。
- 。雑誌を読んでみよう。
- 。自分の力にあった読物をえらんで読もう。
- 。ニュースを読んでみよう。
- 。品のない読物を読もう。
- 。しばいやそい画をみよう。

九 読書カード(その二) (鉄筆で 読書カードを わかりやすく 書く)

読書しらべ	氏名	
たずねることがら	その答	
一日の中で何時ごろ読書をするか		
五分間に何字平均に読むか		
このごろこのんで読む本はどんな本か		

本書学習指導の目あてと要領

- 一 えんぴつで原稿用紙に早くきれいに書く。
- 二 えんぴつで学習したことなどをまとめて、わかりやすく早く書く。
- 三 鉄筆でいろいろなカードを作る。
- 四 ペンの持ちかたと、その使いかたをおぼえる。
- 五 ペンで手本を見て、方眼紙におちついて書く。
- 六 ペンで絵はがきにきれいに書く。
- 七 ペンで電報を書く。
- 八 漢字に注意が加わる。

(なお各ページについては、「書きかた指導書」に詳説してある。)

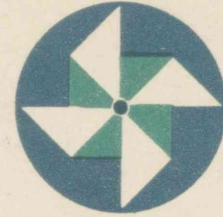
そうてい 河野鷹思

書き方 五年上

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION
(DATE SEP. 14, 1950)

昭和二十五年九月十四日 印刷	著者 石 森 延 男	定価 十四 円
昭和二十五年九月十八日 発行	著者 金 田 心 象	
発行者 東京都品川区東大崎一丁目五三三番地 光村図書出版株式会社	代表者 大江 恒 吉	
印刷者 東京都品川区東大崎一丁目五三三番地 株式会社 光村原色版印刷所	代表者 光村 利 之	

発行所 東京都品川区東大崎一丁目五三三番地 光村図書出版株式会社



5

上

なまえ

広島大学図書

0130449897



出版株式会社